

太宰治の天才観

—中期作品から見られる天才像を中心に—

劉 宛琦

1. はじめに

自分は一体、才能があるかどうか。この問題を、ほとんどの創作者は心の中に問うたことがあるであろう。太宰の作品には天才、あるいは才能豊かなキャラクターが幾人かみえる。このことから太宰もまた天才について深思したことがあるのではないかと推測される。

太宰文学の中において、才能ある人物が現れる作品がとりわけ一時期に集中することはない。太宰文学を三期に分けてみれば、どの時期にも天才や才能ということに言及する作品が存在する。太宰文学において才能あるキャラクターはどのような言動を行っているか。同作品のなかで他のキャラクターは天才をどう思っているか。これら天才に関する描写を整理することによって、その特徴を見つけることができるのではないか。作品の描き方から、太宰はいかに天才を形象化したかについて究明したいと思う。

本稿では太宰の中期作品である「清貧譚」、『風の便り』と「水仙」を中心に、天才ということについて簡略的な分析を試みたい。

2. 先行研究

本名津島修治の太宰治は昭和四十二年（1909）、青森に生まれた。実家が大地主なので、子供時代は豊かな生活を送っていた。絵本や童話を読むことが好きであった。小学時代は読書と作文が得意で、「いつも首席で……企画力、演出力にとんだ、健康なはずらつことという印象を与えたという。」のちに青森中学に入学し、井伏鱒二、芥川龍之介、菊池寛などの小説を読み、作家を志望しはじめた。

しかし太宰の一生は、順調ではなかった。昭和二年（1927）芥川の自殺に大きなショックを受け、学業を放棄し、私生活も一変する。小山初代と結婚するため実家に分家除籍されたこと、東大の卒業不能になったこと、芥川賞に落選したこと、パピナール中毒になったこと、妻の姦通事件、健康問題など、さまざまな挫折により、一生のあいだに幾度も自殺を繰り返す人生をおくる。

子供時代文才のあることが称賛されたが、成年以後多くの挫折に会い、作品が出版社に突き返されたこともある。そうした心境が、多少なりとも作品に反映しているであろう。

太宰の作品という、よく三期に分けて討論されている。前期は昭和十二年暮れ頃までであり、中期は昭和十三年から、石原美知子と結婚した後終戦まで、後期は終戦から二十三年の死亡までである。そのうち中期は太宰の人生においてもっとも心身の安定性を保っていた時期と認められる。作家としての自覚を持ち、明るく、健康的で、理想主義的な作品を多く完成した。

3. 中期作品に現れる天才像

3. 1. 「清貧譚」

昭和十六年に発表された「清貧譚」は、中国清代の怪奇小説集『聊齋志異』の「黄英」に基づいた翻案小説である。あらずじはほぼ同じといえるが、太宰が人物の性格や行動に創意を加えたため、その雰囲気と趣は明らかに異なっている。

主人公の才之助は非常に菊が好きで、ひどく貧乏でありながら、よい菊の苗があれば、いくらかかっても手に入れる。「私は、やつぱり苗が良くなぐちやいけないと思つてゐるんです。」と、はじめて陶本三郎と出会ったとき、才之助は自分の菊作りについての考え方を述べる。それに対し菊の精である三郎は「菊は苗の良し悪しよりも、手当ての仕方ですよ。」と主張する。後に三郎は姉とともに才之助の家に入居し、たくみな菊作りの技をみせ、さらに菊を売ることにより裕福になる。三郎に菊の作り方を聞いた才之助は、「君は天才で、私は鈍才だといふわけだね。」と反応する。しかし三郎は叱るように、「私の菊作りは、いのちがけで、之を美事に作つて売らなければ、ごはんをいただく事が出来ないのだといふ、そんなせつぱつまつた気持ちで作るから、花も大きくなるのではないかとも思はれます。」と反発する。

村松定孝は「『清貧譚』の才之助の高潔さと、菊を売らねば生きる道がないと叫ぶ三郎の主張とは、二つとも戦時下の太宰の相矛盾したあがきと焦燥を代弁し

ているものと考えられるのである。」と解釈した。もし村松氏のように二人とも太宰の化身として見なし、才之助が「先天の才能」を重視する方で、三郎が「後天の態度や努力」を重視する方として見ればどうであろう。一体、太宰の心においては、どのほうが勝ったか。菊の精である三郎はもちろん菊作りの天才といえる。その才能によりお金をもうけた三郎は、最後には「菊を作るのにも、厭きちゃつた。」といい、過度の飲酒によって故意に自らの生命をそこなう。それに対し、消極的に菊を売ることには意見を出さない才之助は、美しい嫁をもらい、お金持ちになる。物語の表面から見れば、妥協した才之助は負けた。しかし結果から見れば、負けたのは三郎かもしれない。

また三郎が才之助に対し、時々無関心、あるいは軽視する気持を洩らすという、原作にない描写を加えている点に、太宰が思う天才の形象の一斑を見てもいいかもしれない。

3. 2. 『風の便り』

昭和十六年(1941)に発表された『風の便り』は、「風の便り」、「秋」、「旅信」と、三つの部分から構成されている。これは戦時中、用紙が配給制になったため、長い小説を一回で全部書き終えることができなかつたためという。木戸一郎と井原退蔵という二人の作家がやりとりする手紙により、太宰の文学観や芸術観が示されている書簡体小説である。

木戸一郎は「自然主義的な私小説家」と評価される作家で、井原退蔵は「明治大正の文学史に、特筆大筆されてゐるくらいの大作家」である。最初、木戸がひそかに尊敬している井原に手紙を出し、前後合わせて十回、手紙を往復させる。木戸を太宰、井原を井伏鱒二、佐藤春夫あるいは志賀直哉に比定する説があり、木戸を田中英光、小山清、井原を太宰に比定する説もある。木戸も井原も太宰によって創作された人物なので、この二人は太宰の心の中にある二つの部分と見てもいいのであろう。

『風の便り』の最後の二通により、木戸と井原が温泉宿で二日間泊まっており、それによって互いへの印象を変えたことがわかる。「あなたはいつでも、全身で闘つてゐる。全身で遊んでゐる。」「あなたは生まれながらの「作家」でした。」と木戸は井原に書く。木戸が「作家を鼻にかけて」おり、「井原と木戸を、いつでも秤にかけて較べてみてゐました」と井原は思っている。

「天才とは、いつでも自身を駄目だと思つてゐる人たちである。」井原は最後にこの一言を手紙の末につける。もしこれが本音ならば、井原は木戸を天才と

思っており、それは太宰が自分を天才と思っていることを意味するか。しかしこの一句の前に「あんまり悪口を言ふと、君がまた小説を書けなくなるといけないから、最後一つだけ、君を飲ばせる言葉を付け加へます。」とも書いており、木戸を慰める意味があるかもしれない。井原の本音、あるいは太宰の本音は、さらに深く研究する必要がある。

3. 3. 「水仙」

昭和十七年に発表された「水仙」は、太宰が十三、四の時読んだ「忠直卿行状記」からの発想といわれる。「水仙」は「新忠直卿行状記」等の題で、長く胸中であつた主題を書いたものだという。

この短篇小説の主人公草田静子は実家が破産したことに非常に恥しく思っている。草田は妻の静子を慰めるため洋画を習わせ、また静子が絵を習いに通うアトリエの学生と画伯に、静子の才能を賞賛することを依頼する。その結果静子は自分が本当に天才だと思ひこみ、芸術家としての生活を実現するため家出する。しかし最後は精神の不調をきたし悪い酒を飲みすぎて耳が聞こえなくなるという悲惨な結果に至る。

かりそめの褒め言葉で得た錯覚か、本当に才能があるのか。静子は一体天才といえるのか。「本当に、天才みたいなところもあるんです。」という草田の言葉と、「二十世紀にも、芸術の天才が生きてゐるのかも知れぬ。」という太宰の結び言葉により、静子が絵画の才能があることはわかる。

「古来、天才は自分の真価を知ること甚だうといものださうである。自分の力が信じられぬ。そこに天才の煩悶と、深い祈りがあるのであろうが、僕は即人の凡才だから、その辺のことは正確に説明できない。」と太宰は述べる。「自分の力が信じられぬ。」ということが、おそらく『風の便り』の「天才とは、いつでも自身を駄目だと思つてゐる人たちである。」という一句と深い関係がある。自らの才能に自信がないということは、太宰が認定する天才の一特徴といえるのであろう。

4. おわりに

以上、三つの作品は違う形により作成されたが、太宰の形象する天才の特徴や太宰の天才への考え方が多少窺えるであろう。

これからはまず前期と後期作品における天才に関する描写を整理し、中期の作品とあわせて太宰の天才についての考え方をさぐりたいと思っている。太宰にとってどのような人が天才と呼ばれるか。その標準は時間により変わったか否か。時期により作品中に現れ

る天才の形象が変わるかどうかを観察し、創作当時の太宰の生活環境、あるいは社会や時勢を考察し、太宰の前期から後期までの天才観の変遷について研究したいと思っている。

テキスト

太宰治（1989）「清貧譚」『太宰治全集第四巻』筑摩書房
——（1989）「風の便り」『太宰治全集第四巻』筑摩書房

——（1989）「水仙」『太宰治全集第五巻』筑摩書房

参考文献

荻久保泰幸（1991）「太宰 治作中人物事典」『国文学 解釈と教材の研究九月号』学灯社
傳馬義澄（1987）「『風の便り』」（1987）『国文学 解釈と鑑賞六月号』至文堂
村松定孝「太宰治—「清貧譚」「竹青」と「聊齋志異」

りゅう えんき／台湾大学日本語学科大学院 大学院生